

## 届かなかった「声」と「発言」



写真は名古屋都市センターから撮ったものだ。12階「市民ライブラリー」は、資料が豊富で見晴らしもよいので、よく利用する。窓からは、天気がよいと御岳などの山々も一望できる。ここで下記二つの原稿を書いて投稿した。首を長くして待ったが、残念ながら採用されないようだ。たぶん採用されないだろうと思って投稿したが、せっかくなのでレポートに記しておきたい。

「声」には数多く投稿してきたが、やはり掲載されたものが記憶に残る。なかでも2014年9月14日に「時の権力への批判を緩めるな」と題して4本社版に掲載され、全国に届いた私の「声」が忘れられない。じつは10日前に池上彰「コラム掲載」問題でも腹が立ち投稿したが、掲載されなかった。どうせ掲載されないと思いつつ、「声」を伝えずにはおれなかった。戦後政治が揺れ動くなか、朝日新聞バッシングが繰り返され、新聞メディアの危機であった。新聞社間の「足の引っ張り合い」だけはやめてほしい、もう一度だけ「朝日新聞しっかりしろ」と。

それから2年数カ月。朝日新聞の「改革」は進められつつあるが、政治とメディアの劣化は激しい。安倍政権にすり寄る新聞など、メディアの二極化が目立つ。時の権力、政権をしっかりと監視する朝日新聞の役割に期待したい。毎朝、楽しみに読んでいるのが「声」である。幅広い読者の生の声が聞けるからだ。どんな「声」を掲載するかも注目している。同感する「声」は友人に知らせている。「声」を通じた読者間の「交流の場」ができないだろうか。

本紙2月2日朝刊の「ニュース女子」問題の釈明について、釈然としないものがあった。この偏向番組については、早くからネット媒体で知った。「沖縄ヘイト」、人権侵害として、メディアの責任が問われる問題だ。番組司会を東京新聞論説副主幹が務めていることに、つよく疑問に感じていた。遅まきながらの謝罪は当然である。「他メディアで起きたこと」とは言うが、本紙にも直接関わる問題ではないのか。本紙の「顔」でもある副主幹の関与、番組を放送したテレビ局の株式保有など、他人事では済まされないのではないか。

東京新聞・中日新聞は「特報」をはじめ、鋭い報道に期待してきた。今回の事件は、残念ながらその信用を揺るがすものだ。「我が事」として真摯な反省を求めたい。

(2017年2月26日)